



## VOL.1

●日本土木工業協会の組織を分かりやすく解説。建設業の現状をグラフで紹介。ビッグプロジェクトを控えて関西が大きく活気づこうとする時代の空気をとらえた創刊号。変化の時代を迎えた建設業の姿や日本土木工業協会の組織について、活動の現状を報告。



## VOL.2

●建設産業を取り巻く状況を分析し、さらに明日の近畿の姿をクローズアップした編集内容を紹介します。動き始めたビッグプロジェクトや関西の地域や歴史に焦点をあてた企画。これから関西は、どう動くのか？そんなテーマを核として、インタビューを展開、変化する時代を語る情報を提供。  
■インタビュー  
関西国際空港株式会社社長 竹内良夫氏



## VOL.3

●日本土木工業協会関西支部の設立20周年を迎え、充実した誌面構成とした記念号。近畿の未来をテーマとした未来を描くプロジェクト、土木の重要性、これからの課題を様々な視点から検証した。対談、インタビューや取材形式を盛り込み時代を語る生の声を集めた企画展開。  
■対談  
近畿地建局長 萩原兼情氏  
イラストレーター 真鍋博氏  
■インタビュー  
本州四国連絡橋公団  
第一建設局長 遠藤武夫氏



## VOL.4

●2025年「首都新島」構想。その基本理念を展開する中、近畿の可能性さらにはハイテク社会における豊かさとは？人間と科学のかかわり方は？社会の多様化、個人の個性化もたらすものは？労働時間の短縮と増える余暇時間を自分なりの使い方ができるかどうかは大きな課題である。これらのための施設整備を都市再開発問題に絡めて掘り下げる。  
■対談  
近畿地建局長 萩原兼情氏  
建築家 黒川紀章氏



## VOL.5

●豊かさを幸せにつなく、多様さ創造できる新しい体制を探る。これまでの画一性を好んだ日本人は、豊かになった今、画一性からの解放、個性化・多様化への指向を強めている。一方、経済大国として、これまでの日本的価値観の修正を対外的にも迫られている。日本や日本人は今度どう変わるか、を近畿の視点から追求。  
■対談  
近畿地建局長 布施洋一氏  
経済評論家 堺屋太一氏



## VOL.6

●21世紀に向けた近畿の躍動が始まっている。独自の構想を推進するビジョンの中に近畿の未来を読む。近年、関西では地域開発・活性化をめざした様々なプロジェクトが進められている。「花の万博」の総合プロデューサー・小松左京氏をゲストに迎え、関西浮沈論、21世紀の関西への多方面からの期待と国際都市の可能性を探る。  
■対談  
作家 小松左京氏  
日本土木工業協会 関西支部長 勝田悦之氏



## VOL.7

●日本を美しい国にする。地球的規模での自然保護が叫ばれるいま、しっかりと設計された環境づくりが切に求められている。そのためには「国土美学」そのものを見直すことも必要ではないだろうか。我々先人から預かった美しい国土をさらに美しい、心から愛せる環境として、時代を引き渡すために建設産業は、今後どのようなかたちで貢献できるのか、また、開発と自然との調和・共存はどのように図っていくべきなのか、その未来像を探る。  
■インタビュー  
地球物理学者 竹内 均氏  
聞き手 当支部編集委員



## VOL.8

●エコノミーからエコロジーへ。世界的な環境に対する意識の高まりの中、環境と調和をめざす建設産業へと転換が求められている。本物、堅実さを求める志向が「モノづくり」を通して未来を築きある豊かさの実現、真のアメニティへの実現に向けて懸命の努力を重ねてきた建設産業が見直されてきている——ことをテーマとする。  
■対談  
近畿地建局長 定道成美氏  
ジャーナリスト 兼高 かおる氏



## VOL.9

●都市の「美しさ」を考える——もうひとつの「都市論」へのアプローチ。現在、都市の景観や未来都市の構想をめぐる様々な議論が交わされている。これまで都市づくりに関わってきた建設業もその役割となると、ともすればハード面に限定されたものとして受け止められがちであった。建設産業は、ハードウェアからソフトウェアへと都市づくりの新しい時代の変化にいかに対応すべきか。その役割、有り方をもう一つの「都市論」として考える。  
■対談  
国際日本文化研究センター助教授 井上章一氏  
ジャーナリスト 近藤三津枝氏



## ■この10年を振り返って。

思い起こせば、「しびる」第1号は私が就任した昭和59年に創刊されました。ちょうど京阪奈学研都市、明石海峡大橋、関西新空港の3大プロジェクトが着工直前に迫っていた時期。関西の活気がみなぎってきた頃で、関西国際空港の起工式など、まだ記憶に新しいほどです。国際化の重要性が叫ばれるようになった時代でもあり、建築家の黒川紀章氏や堺屋太一氏との対談企画では、自然と人間が調和した心の豊かさを目指した近畿の未来の在り方など、貴重な意見をお伺いできたのは素晴らしい経験でありました。また建設産業への女性の進出などでは、これからの時代の流れを感じたものです。  
第6号の小松左京氏との対談は、予定していた近畿地建の堀局長に代わって急遽ピンチヒッターでインタビューする大役をいただいた思い出深い、忘れられないことのひとつです。近畿復興のためには地球規模で考えて……というご意見には今日の時代をいち早く捉えていて大きな感銘を受けました。  
またこの年は花博の開催もあって非常にムードの高まっていた時期で、バブルはまさに最盛期。その後、バブルの崩壊や環境の問題がクローズアップされる時代に移り、地球を救う環境づくりのために建設産業の役割はより大きなものとなってきました。  
同時に、建設技術をより多くの人に伝え、一般社会の理解を得られるよう広報活動の面で努力する必要性がますます高まっています。  
この10年間で、建設産業は多様な変化を経験し、いままた大きく転換の時を迎えようとしています。こうした時期にバトンタッチしなければならず、大変な苦勞を置いていく辛さを感じています。  
心のこりではありますが、新たなる時代の始まりと考え、この思いを託したいと思います。

前支部長 勝田悦之